

# 島根県ローイング協会

## <沿革>

- 明治16年 宍道湖にて島根の漕艇活動開始
- 昭和24年 島根県漕艇協会発足
- 平成10年 漕艇協会からボート協会に名称変更
- 令和5年 島根県ローイング協会に名称変更

## —— これまでのあゆみ

日本で初めて漕艇が行われた明治10年にわずかに遅れて、明治16年松江中学が宍道湖にカッターを浮かべたのが、島根県での漕艇の始まりとされている。明治34年大日本武徳会主催の第1回全国中等学校端艇競漕大会で島根師範が優勝するなど、島根の漕艇は高いレベルにあった。大正に入っても旧制松江高等学校が全国大会で優勝している。戦中は活動が中止され、戦後昭和20年旧制松江高校の端艇部が復活し、昭和24年には島根県漕艇協会が設立された。学制改革を経た島根大学は、昭和30年に艇庫を建設して活動を再開した。



明治36年全国大会で優勝した県立第1中学校端艇部

昭和57年、第37回国民体育大会に向けての準備が始まると、漕艇会場問題では協会役員は大変な苦勞をした。並行して進められた選手強化事業は、FISAジュニア世界選手権に日本代表として選出された選手もいたが全体として強化は進まず成果が上がらなかった。しかし、危機感を持った協会の組織強化が急速に進み、準備は加速していった。第37回国体では美保関漕艇場での男女総合成績2位という成績と、台風直撃による競技日程変更も乗り越え、運営面でも成功裏に終えることができた。



昭和57年島根くにびき国体島根県選手団

国体を通じてシェル艇化への対応や新設された松江東高校に漕艇部が創部、国体ナックル艇を活用した松江市民レガッタの開始など、漕艇を取り巻く島根県環境は

大きく進展した。平成に入ると平成7年に創部された中国電力ボート部の艇庫を拠点として、社会人、学生が合同合宿や練習で力をつけた。平成8年にはアジア選手権女子2×で3位、平成9年国体では成年男子2×で優勝。平成17年世界ジュニア選手権日本代表に2人選出、平成19年インターハイ女子1×の優勝など、各種大会で上位入賞できるまでに競技力が向上した。

一方でねんりんピックの開催、平成9年に始まった山陰マスタース大会など、各種地方大会も増えた。県内3地区(松江・江津・雲南)の各団体が主催する市民レガッタは隆盛で、職場グループや60歳以上のOBクルーが楽しむなどボート人口の増加と年齢層が拡大、生涯スポーツとしても広まっていった。平成23年には待望の公認常設コースが雲南市のさくらおろち湖に建設され、平成27年全日本マスタース大会、翌年の全国高校総体と連続して全国大会を開催している。



さくらおろち湖の常設コース全景

## —— 現在の状況

令和に入り競技人口に陰りが見え始め、競技者も減少傾向にある。少年、成年とも競技成績は伸び悩んでいる。シングルスカルでの漕力向上が主となり、安全面の不安もあり高校顧問の負担増となっている。2030年島根かみあり国スポ開催に向けて組織体制の強化と計画的な選手育成が課題となっている。ジュニアの選手が数人ではあるが、体験会を通じて活動しているのが光明である。

## —— これから

ローイング協会の歴史は、それぞれの時代で浮き沈みがある。昭和57年「くにびき国体」を迎える時期も低迷していた。しかし、協会の総力を結集して乗り切り、隆盛の時代を作っている。2030年島根かみあり国スポに向け、関係者が団結し成果に結びつけたい。全国的に部活動の在り方が変わろうとしており、クラブとして社会教育の範疇での推進も視野に入れ、低年齢層からの一貫した選手育成を図る必要がある。成年の育成は大学での競技継続が鍵を握っている。関係者がサポート体制をしっかりと組んで、目前の島根かみあり国スポの成功に向けて邁進する決意である。